
【重いおみあげ】

とーよー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【重いおみあげ】

【Nコード】

N8142T

【作者名】

とーよー

【あらすじ】

重いおみやげを貰う話

地球人と交流的なファーストコンタクトを終えた銀色の宇宙人は科学者代表と向かい合っていた。

「ソレデハ、ワレワレは、ソロソロ、自分達の星にカエリマス」

…そういうと、銀色の宇宙人は小さな石の様な物を学者に手渡した。

学者は左手で、その小さな石の様な物を受け取った。

…その瞬間…

「ぎゃあああああ！！」

―ブチッ！―と学者の左腕は肩から引きチギレその腕はコンクリートの地面を一気に突き破り、地球の裏側のブラジナンチャラという島国の地面に大きく飛び出した。

腕のチギレた科学者は青ざめた顔面で真っ赤な血が吹き出す自分の左腕―と、いうより、ほぼ左肩を右手で抑え宇宙人に聞いた。

「…い、いまの、石はなんですか…」

『…ワレワレの星でのオヤツみたいなものです。君達の星で言うトコロのキャンディーやガムの様なモノだと考えてくれればヨイデシヨウ。良かったら食べてみてクダサイ』

「…重さは…重さは一体どのくらいあるのでしょうか?…」

科学者がそう聞くと、銀色の宇宙人は、少し考えた様な銀色の表情を浮かべ、緑色のカバンみたいな物から、スカイブルー色した電卓みたいな物を取り出し、何かを計算し初めた。

科学者は出血しまくりで顔が白くなっていた。

—そして—

—その頃—

—同じ頃—

地球の裏側では、その宇宙人のキャンディー的な物をブラジナンチヤン人がグルツと数人取り囲み何やら話をしています。

「一体コレは
ナンなんだ?」

「地面から突き出て来たぞ」「触っていいのか?」「やめとけ、キケンだ」「いや持ってみよう」「アレ。アレレ」「どうした」「いやいや、めっちゃくちゃ重いぞ」

「なに言ってる。そんな訳ないだろ。おれが持ってる。アレレ本当だ。死ぬほど重いな。」「嘘つけ!こんなに小さな物が!重い訳は!ないではないか!アレレ?本当だ!むちゃくちゃ重いな!一体!全体!どうなってんだ!」

ブラジナンチャン人達はシャガミ込み、その重いアメを覗き込んだ。死にかけの科学者は今にも倒れそうな様子で宇宙人に向けて声を絞り出した。

「…あの…重さは…」

ソレを聞き

宇宙人は言った。

『ハイ。ワカリマシタ。ほんの2ベーマストです』

「…に…ベーますと…?…」

「エエ…あなた達の地球単位で表現するところの…61358511973億トンと出ました。…コレはあなた方にとってはどういった数字なのでしょう？重いんですか？軽いんですか？どうして腕がチギレたんですか？再生機能は無いんですか？あなたの腕と私が渡したおみやげは、なぜに、地面の奥底に沈んでしまったのでしょうか？まったく変わった生物ですねー。地球人というのはー。ソレデハ、ソロソロ、サヨウナラー」

そういうと銀色の宇宙人は銀色の宇宙船に乗り宇宙の彼方へ飛び去っていった。

―そして―

―その頃―

―同じ頃―

ナンチャラ人の人達はグルツとみんなで囲み込み、しゃがんでアメを舐めていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8142t/>

【重いおみあげ】

2011年10月9日04時51分発行